

『こころ』の「先生」は「私」に何を書き残したのか：ポール・ブールジェと比較して

毛利，郁子
九州大学大学院地球社会統合科学府：博士後期課程1年

<https://doi.org/10.15017/1787565>

出版情報：九大日文. 26, pp.49-66, 2015-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

『こころ』の「先生」は「私」 に何を書き残したのか

——ポール・ブルジェと比較して——

MORI
毛利 郁子

一、はじめに

夏目漱石『こころ』（『朝日新聞』一九一四年四月二〇日～八月一日）の「先生」は「私」に遺書を書き残す。「先生」は「私」に何を書き残したのか。「先生」はただ自分が犯した罪を告白したかっただけなのだろうか。誰にも言えず、一人で苦しんだ罪の意識と苦しさをただ「私」にわかって貰いたかっただけなのであるか。「私」はただ他人の犯した罪の告白の聞き手でしかなかったのだろうか。「私」が受け取ったものは、他人の秘密、罪の告白に過ぎなかったのだろうか。いや、「先生」はもともと真剣に言い残したはずだ。そして「私」はその後生きていくうえで重要なものかを先生の遺書から手に入れたはずだ。

このことをポール・ブルジェ (Paul Bourget) の『弟子』^① 『現代心理論集』^②と『こころ』の比較において考察する。前号『大日文』二五号 (二三頁～三五頁)でパスカル・ロー (Pascal Laut) の論文^③をもとに『こころ』と『弟子』の比較をし、ここでは

「不可知」と「モラル」について考察した。本稿では同じくローの論文をもとに『弟子』、『現代心理論集』に対する『こころ』の比較として「師から弟子へ」という点での考察をする。『弟子』だけではなくポール・ブルジェの『現代心理論集』も比較研究の対象とする理由の一つは、ローの次の言及からである。

Il ne serait pas étonnant que Natsumé ait connu Paul Bourget,

son Disciple et les *Essais de psychologie contemporaine*. (漱石がポール・ブルジェ、その『弟子』と『現代心理論集』を知っていたということは驚くべきではない。) (Pascal Laut 「Lorsqu'un Français lit "kokoro"」 *France-Japon* 47, 1940, p91) (拙訳 以下英文共拙訳)

ローは、『弟子』だけではなく『現代心理論集』についても漱石が読んだ可能性があると見ている。そしてまた次の言及が大きな示唆となっている。

Il me semble bien plutôt que Natsumé Sôséki adapta un art occidental à des sujets sortis de la vivante Restauration de Meiji et qu'il réalisa un grand roman psychologique japonais. (むしろ夏目漱石は明治維新から生じた主題に西欧的手法を適用したように思われ、そして日本の偉大な心理的小説を実現した。) (Pascal Laut 「Lorsqu'un Français lit "kokoro"」 p91)

ローは漱石が明治という近代化がもたらした問題に西欧の芸

術の方法を用いていると考えた。『弟子』との比較で考察した

「不可知」「モラル」もその中に含まれるであろう。しかし、それだけではなく、ローは『現代心理論集』の一〇人の作家たち（ここで全員取り上げない）の影響があると考えていると推察する。そしてそれは、Kと「先生」の生き方、性格描写に現われているとして考察する。

本稿ではまず「師から弟子へ」という点でブルジェの『弟子』、『現代心理論集』と漱石の『こころ』との類比を考察する。そして『現代心理論集』の評論の一部「ギュスターフ・フロアベル」との比較からKと「先生」の性格描写を考察し、そのうえで、「先生」は「私」になにを言い残したのかという問題に答えていく。

二、師から弟子へ

①『弟子』と『現代心理論集』

『弟子』の「序文」で作者ブルジェはフランスの青年、読者たちに語りかける。

私はこの書をフランスの一青年たる君に献じたいと思ひます。君が一八歳以上にはなつてゐても、まだ二五歳にはならない青年で、君よりも先に生まれた我々の書物を読みながら、君の苦しみとなつてゐるいろいろな問題の解答を求めつつあることを知つてゐるだけです。(ポール

ブルジェ『弟子・上』内藤濯訳、岩波書店、一九四一年七月 二頁)

当時のフランス青年たちに対し、ブルジェは、危機感を抱き語りかける。その頃のフランス青年は、ブルジェから見ると良い状態とは思えなかつた。一方は生存競争主義者であり、成功といつてもただ金銭のことあるのみで快楽主義者であり、俗物であるという種類の者たちである。もう一方は知的で、洗練されてはいるが、快楽主義者、虚無主義者、さらに利己主義者でもあり、善、悪、美、醜、正、邪などには関心を持たないという種類の者たちである。

当時のフランスの青年がそのような状態になるのも理由があるとブルジェは考えていた。その理由とは作家たちの責任であるということである。そういった結論を『弟子』以前『現代心理論集』を著した時に出していた。『現代心理論集』一八八五年の序文⁽⁴⁾に次のことが書かれている。

新世代に特有な魂のありようは、すでに前世代の理論や夢想のなかに萌芽として包含されていたという命題を、これらの肖像ほどはつきり示してくれるものはないように思えたからである。青年たちは先輩から人生鑑賞のある仕方を受け継ぐのであるが、彼らは自らの経験によつてそれに變更を加えてから、今度は次に来る人に引き渡す。文学および芸術作品は、こうした心理的遺産を伝達する一番有力な手段である。だからそうした作品は、精神や感情の育成者

として研究しなければならない。(プールジェ『現代心理論集』
平岡昇・伊藤なお訳、法政大学出版、一九八九年十二月 七頁)

一八八三年の序文では文学作品が「感情の模倣」⁽⁵⁾を引き起こすと述べていたが、さらに八五年の序文では、文学作品は世代を超え「心理的遺産」を受け継ぐ手段となるという。文学、芸術作品によって人生鑑賞の仕方を受け継ぎ、それに自分の経験を加え、さらにそれは次の世代へと継承されていく。「心理的遺産」として受け継がれたものは、次の世代の精神、感情ひいては人生を育成していくのである。それゆえ文学作品を書く師には責任があると結論づけたのである。

プールジェは一〇人の文学者たちの作品を一人一人心理分析し、それらの文学が及ぼした影響を考察した。それがまとまって『現代心理論集』となった。『現代心理論集』は一八五〇年代(第二帝政時代)二〇歳代であった作家たちが書いた思想的記録を、一八七〇年代(普仏戦争とパリコミューンの時代)、すなわちプールジェが二〇歳のころ読み始めて、今、一八八三年〜一八八五年の自分、およびプールジェたちの世代の精神状況を描いたものである。一八五〇年代二〇才の作家とはテーヌ(Hippolyte Taine 1828-1892)、『ボードレール』(Charles Baudelaire 1821-1867)、『フローベル』(Gustave Flaubert 1821-1880)、『ルナン』(Ernst Renan 1823-1892)、『ルコント・ド・リエール』(Lecointe de Lisle 1818-1892)、『ゴンクール兄弟』(Goncourt 1822-1896, 1830-1870)、『小テュム』(Alexandre Dumas Fils 1824-1892)、『ツルゲーネフ』(Ivan Turgenev 1818-1883)、『アミ

エル』(Frederic Amiel 1821-1881)である。スタンダール(Stendhal 1782-1842)は世代が早いですが、一八八〇年くらいに自分は理解されるだろうといった通り、この評論に入れられている。プールジェは初期はテーヌの弟子だったので、テーヌのいう作家の考え方、感じ方をもとに考察していったが、結果はテーヌとは違った方に行く。この評論の特徴について『現代心理論集』の邦訳者平岡昇が解説で次のように述べている。

同時代の感性を鋭く抉りだし、分析対象の中に自己を柔軟に投入し、対象との合一のうちにその作家の内面を描出し、同時にそのことを持つてとりもなおさず自己認識、自己表出をしていることである。ヴィクトル・ジロー⁽⁶⁾は(略)プールジェはこの評論によって「心理批評」を試みただけではなく、「告白批評」という新しいジャンルを創始したと述べている。(プールジェ『現代心理論集』前掲三四九頁)

プールジェは先代の作家たちを分析した結果、自分の中に先代の作家たちの影響を見出し、そのことによって自己認識をすることになった。プールジェが弟子の立場に立って、自己を考察したのである。その結果、先代の作家たちがもたらしたものは次のようであった。

この精細な長々しい探求の結果は憂鬱なものになった。この一〇篇の評論を通じて私の検討したすべての作品から、

同一の影響が、つまり、痛々しい、一言で言ってしまうれば、どこまでも限りなくペシミスティックな影響が浮かび出て来るように思われたのである。(プールジェ『現代心理論集』前掲八頁)

ペシミスムとはプールジェの定義では「彼の作品が、全体として読む者に意気阻喪させる印象をあたえる」⁽⁹⁾ということであるが、そのようなペシミスムを生み出すのは、観察をもとにする文学であるという。一〇人の作家たちは、レアリズム、広い意味で自然主義作家⁽⁸⁾(ポードレルをのぞく)、観察をもとにする作家である。

観察することは、無意識で豊かな生活から抜け出て、分析と省察と批評にはいることではないだろうか。これは本能の衝動が減少していく確かな徴候だ。そして我々の力の減退がごとごとく悲哀に通じると同様、それはまた憂愁を確実に保証するものである。(プールジェ『現代心理論集』前掲一九七頁)

分析し、省察し、批評することで創作した文学作品は、悲哀や憂愁をもたらすものであるという。一〇人の作家たちだけではなく、当時自然主義作家の頂点に立っていたゾラをも批判する。ゾラの小説は「現在の小説家の流派全体の哲学である重苦しい宿命観」⁽⁹⁾に犯され、「意志の病」にかかり、壮大な希望や

高邁な情熱など「理想」を放棄する傾向が著しいと分析する。それらもさらに付け加わって、現在のフランス青年の魂にペシミスムを巣くわせていると考える。そのことから作家には責任があると考えるのである。どのような作品を書くかによって、次世代の若者を育成し、ひいては国家までも形成してしまう。一八七〇年の普仏戦争は「ドイツ精神」の勝利であり、「フランス精神」の敗北ではなかったのかと『弟子』の「序文」で語る。

プールジェは、自分が作家となつた今、自分自身にも責任があると考え、『弟子』を書き、「序文」でフランスの青年たちに、若者たちに語りかけるのである。

フランスはどうしたら今日の青年たる君によつて生かされるだろうか。(略)君は何等かの理想を持つてゐますか。我々以上の理想を持つてゐるのですか。何等かの信仰を持つてゐるのですか。我々以上の信仰を持つてゐるのですか。何等かの希望を持つてゐるのですか。我々以上の希望を持つてゐるのですか。(プールジェ『弟子・上』前掲一五頁)

そのように問いかける。観察や分析ではなく、「君の魂」を忘れてはならず、意志の自由、精神の重要性を訴える。『現代心理論集』の後、プールジェは意志をもつた女性を描いている。「傷ましい謎」⁽¹⁰⁾と『嘘』⁽¹¹⁾である。青年たちは自由意志を持つた女性を理解しきれず煩悶する。そして女性の自由意志だけで

はなく、青年たちの自由意志の大切さを『弟子』の「序文」によって訴える。

この『弟子』の序文は画期的であった。*French Novelist of Today*の中で漱石の線引きがある箇所である。

Throughout his literary career Bourget has retained something of the pedagogic manner of his early calling. After all he is ever the professor. The didactic habit persists in his custom of introducing his novels by prefaces, setting forth the objects of the works they introduce. The preface of *Le Disciple* is an epoch-making production, at once a sermon and the manifesto of a new school. (ブルジェは文学者としてのキャリアの初めから終わりまで初期の教育的方法を残していた。結局彼はずっと教師だった。説教好きの習慣は序文によって小説を導入するということを主張した。弟子の序文は画期的な作品であると同時に説教であり、新しい学派のマニフェストである。(W. Stephens. *French Novelist of Today* London: J. Lane. 1908 p.151) 漱石旧蔵書)

ブルジェがフランス青年(読者)に訴える。田中琢三⁽¹²⁾によれば、フランスにおいて、師 (*maître*) と思想上の師 (*maître à penser*) とは異なり、思想上の師は威厳をもち、人生を左右するような思想を伝授する。その師が若者たちに意志の自由、精神の重要性を語る。同じく田中によれば「師弟関係」を扱ったものは過去にも多数あるが、この時期の社会背景もあり、特にブルジ

エの『弟子』、モリス・バレスの『根こそぎされた人々』⁽¹³⁾とゾラの『パスカル博士』⁽¹⁴⁾の三作はフランス再興のための熾烈なイデオロギー論争の一環だったという。訴える内容は全く違うが、「師から弟子へ」という形式で書かれたのである。

『こころ』にもこのような「師から弟子へ」の「心理的遺産」の継承ということが表現されているのではないだろうか。

② 『こころ』

『こころ』は冒頭から不思議に「先生」に魅かれていく「私」がいて、「先生」には何かがありそうだという予感がある。「先生」の教えの部分は遺書にあり、最初は「私」のほうが積極的に「先生」に向かっている。

(先生) あなたは私の思想とか意見とか意見とかいふものと私の過去をごちゃくちや考えとるんじゃないやありませんか。

(私) 別問題とは思はれません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私には殆んど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれてゐない人形を与へられた丈で、満足は出来ないのです。(夏目漱石「こころ」『漱石全集』第九巻、岩波書店、一九六四年九月 八七頁)

「先生」は思想家であつたけれども、「私」は単なる思想、学説などが知りたいのではない。思想とともに「先生」が生きた

うえて体得したものが知りたかった。思想だけではただの理論でしかなく、理論は実際の体験が積み重ならなければ、ただの空論でしかない。「私」は考えている。ただ「先生」の思想が知りたいだけではなく「先生」の体験が重なったその精神を受け取りたい。「私」は「先生」から生きた教訓を求めている。これまで生きてきた「先生」から「先生」の体験も重なった『現代心理論集』でいわれた「心理的遺産」を受け取りたいと思っ
ている。

このことをより強く表現しているのは、「血」の比喩である。この血は血縁としての血ではなく、「心理的遺産」を受け継ぐということを表現した比喩である。

私は今自分で自分の心臓を破つて、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。私の鼓動が停まつた時、あなたの胸に新しい命が宿ることが出来るなら満足です。(夏目漱石「こころ」前掲一五八頁)

「先生」は自分の「こころ」、「心臓」よりながれる血を「私」の顔に浴びせかけ、その血を浴びた「私」の胸に新しいものができるのである。すなわち「先生」の得てきた思想と体験とを「私」に渡し、「私」は受け取り、受け取ったものを糧とし、指針としてこれからの「私」の人生を生きる。「先生」の血とは「先生」の思想と、生きた体験であり、それを浴びせかけ「私」に渡す。その浴びせられ、渡されたものが「私」の中に顔から

胸へと入り込む。「私」の胸に宿る新しい命とは、受けとつたもの、「先生」の心理的遺産を糧とし、「私」なりの新しい世代を生きる「私」の生き方である。

『こころ』には比喩が多い。特にKとお嬢さんをめぐって心理戦が描かれる場面では多用される。Kの告白を受けたとき、先生のおどろきを表す「魔法棒で化石された」、Kの開け放された心を表す「要塞の地図」、「先生」の気持ちを表す「狼の如きこころ」、Kのようすを表現する「罪のない羊」、「先生」がKに襲いかかる様子を表す「羊の喉笛にくらいつく」、「先生」の悪行がわかつたときの「鉛のような飯」、その後の人生を表す「黒い光」などである。これらの比喩表現が、この場面を、二人の心理戦の状況をより緊迫したものとして、読者に想像力を喚起させる。そして漱石の作り出す比喩はその情景の核心を表し、表現したいことのよりの確な理解が可能となる。

比喩に関しては漱石旧蔵書、テーヌ、『英国文学史』¹⁵⁾ Chapter IV SHAKESPEARE (シェイクスピア)での記述が参考になる。テーヌはシェイクスピアの文体に、際限のないくらい比喩が使われているという。漱石の線引きも多い箇所である。

By no means, if he speaks thus, it is not from choice, but of necessity: metaphor is not whim, but the form of his thought.
(だが、決してきうではない。彼は故意にかやうな話し方をするのではなくて、必然にきうするのである。比喩は彼にあつては意志の気紛れではなくて、思想の形式である。——平岡昇訳) (H. A. Tane, History

シエイクスピアの比喩は、適当に選択されたものではなく、物事の本質に迫られ必然的に言葉が選ばれたのだ。真の比喩は、電光の閃く間に全光景を描き出す燃える幻影のようなものでありとテーヌはいう。さらに漱石の線引きがある。

Objects were taken into his mind organized and complete; they pass into ours disjointed, decomposed, fragmentarily. He thought in the lump, we think piece meal. (彼の精神には、物象が組織された完全な姿で摂取されたのである。物象は、我々の精神には切り裂かれ、分解したままで切れ切れに映るにすぎない。彼は全体的に考えたが、我々は断片的に考える。——平岡昇訳) (H.A. Taine, History of English literature. p213)

ある物象が比喩によつて全体的に、完全に描き出されたのである。多くの言葉を尽くすより一つの比喩でその物事の全体、本質を描き出す。そのようなシエイクスピアの比喩を漱石は学んだ可能性が高いのではないだろうか。

師が自分の思想や体験を弟子に確実に引き渡し、弟子はそれをもとに新たな生を生きるということ、すなわち「心理的継承」を表現するとき、この「血」の比喩ほど簡潔に、よりよく表現するものはないのではないか。師から弟子への継承は眼には見えないのだが、「血」を浴びせかけるといふことで、師から

弟子への確実な継承が眼に見えるイメージ(像)として表現される。血を浴びせられた弟子の顔から胸へ血が流れ、師の「ころ」から弟子の「ころ」への継承が行われた。そこに新たな命(生き方)を弟子に持つて欲しいという師の願い、また「自分で自分の心臓を破つて」弟子に伝えたいという師の熱意、さらに師として自分の生命が終わることによつて新しい命が生まれて欲しいという先に生きたものの責任が伝わってくるのである。「物象が完全な姿」で把握されたのである。

やうに「先生」と「私」は語る。

(私) たゞ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたいのです。(先生) あなたは本当に真面目ですか。(略) 私は死ぬ前にたつた一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる。あなたは其たつた一人になれますか。なつてくれますか。あなたは腹の底から真面目ですか。(夏目漱石「ころ」前掲八八頁)

「私」も真剣であるがそれを語る「先生」も真剣である。ブールジェが「理想」を持つていきますかと問いかけるのに、『ころ』では「先生」と「私」がお互いに「真面目ですか」と真摯に問いかける。師からの問いかけだけではなく、弟子の方からも師に向かっていく。『弟子』の「序文」以上に二人のつながりの強さが表現されている。「私」は「先生」の「心臓を立ち割つて、温かく流れる血潮を啜らう」としたのである。また

「私」の父の死を見捨てて、「先生」のもとへ駆けつけるという行為も二人のつながりの強さを表現している。

それほどお互いに求めた「先生」が「私」に残す「心理的遺産」とは何だろうか。「不可知」や「モラル」もそのうちの一つであろう。しかしそれだけであろうか。それはKと「先生」の生き方、人物描写の中に描かれているのではないだろうか。そのことに関して『現代心理論集』のフローベル評との比較のなかで考察する。

三、Kと「先生」の生き方

『現代心理論集』は一〇人の作家の評論であるが、邦訳されているのは、五人（ボードレール、フローベル、スタンダール、ツルゲーネフ、アミエル）の評論だけなので、邦訳箇所からの考察に留める。他の作家の影響の可能性も翻訳と共に今後の課題である。しかし『現代心理論集』を漱石が読んだかについても明らかにしなくてはならない。パスカル・ローは読んだに違いないと言っているが、漱石旧蔵書にはない。しかし読んだ可能性は否定できない。さまざま可能性があり、これも今後の調査が必要である。

もし読んでないとしても、漱石旧蔵書の *Modern French Literature*³⁾ は『現代心理論集』と同じくらいの内容を持つている。一三章に分かれていて、中世とルネッサンスから始まる。五〇〇ページほどある中で漱石の線引きが始まるのは

Chapter XI Evolution of Naturalism (自然主義の興隆) 四〇〇頁からのジュールジュ・サンド、アンリ・バールからである。線引きは文章に引かれているところは少なく名前のみが多い。バルザック、メリメ、フローベル、エミール・ゾラと引かれているがモーパッサンやドーテなどは線が引かれていない。この本はフランス文学の流れを十分に知ることができもので、しかもジュールジェの視点が入っているものである。途中ジュールジェが評論した作家の箇所などは、ブールジェを見よという注が多い。漱石がブールジェの視点のフランス文学を知っていた可能性は高い。

また『現代心理論集』では作家の作品評論とともに、ペシニスム、ニヒリスム、ディレッタンティスム、コスモポリチスムの概念や近代化がもたらす様々な問題も分析されている。科学とデモクラシーの弊害、それに伴う宗教的信念の喪失、民主主義の弊害、思想と理知の濫用、肉体的精気の枯渇などを対象としている。日本でも近代化によって生じた問題があり、その問題を漱石は西洋的手法を用いて考察しているとパスカル・ローに思われたのだ。ここでは特にフローベル評に注目する。

①ギユスターヴ・フローベル (Gustave Flaubert)

『現代心理論集』のフローベル評では特に近代化による問題として、思想と理知の濫用、肉体的精気の枯渇、意志や意欲の低下がとりあげられている。フローベルは後期ロマン派の影響があり、熱狂的にロマン派の「理想」を抱いたとされる。しか

し彼は科学の教育をうけ分析力も持っていた。その分析力により、ロマン派の理想は、その環境と自分自身の幻想との背馳に陥り「魂の虚無感」を見ることになる。ブルジェは評する。漱石はフロールベルに対して次のように述べている。

明治四一年五月一七日（日）小宮豊隆あての手紙
サランポー⁽¹⁷⁾というものを読み居候。瑰麗無比のものに候。中々うまいものに候。フロールベルは両刀使いに候。エラク候。（夏目漱石「書簡中」一〇六六『漱石全集』第三卷、岩波書店、一九九六年九月 一九二頁）

漱石の日記 明治四二年三月一五日（月）
ツルゲーネフの手紙をよむ。トルストイとフロールベルに敬服している。（夏目漱石「日記・断片下」『漱石全集』第二〇卷、岩波書店、一九九六年七月 八頁）

「両刀使い」⁽¹⁸⁾という表現は漱石旧蔵書の *Modern French Literature* の記述から、ロマン派でもあり科学的分析力（自然派）もあるというブルジェの認識と重なると思われる。

フロールベルはロマン派として、やはり「理想」をもつ人間を創作する。『ボバリイ夫人』⁽¹⁹⁾のエンマや『感情教育』⁽²⁰⁾のフレデリックについてブルジェは次のように言及する。

エンマの美しい感情生活への郷愁ほど高貴な夢はあるま

い。また優れた愛の対象を前もって作り上げるほど繊細な魂の立派な証明はあるまい。（ブルジェ『現代心理論集』前掲六〇頁～六一頁）

フレデリックは若くて誇りをもつ男の望みうるものの中で、最も現実に望ましいものすなわち芸術家としてのすぐれた能力と恋愛を選びとつた。（ブルジェ『現代心理論集』前掲六一頁）

しかし彼らは破滅へと至る。なぜか。ブルジェは分析する人間の営為が結局は失敗に終わるといふのは、彼の眼には永劫変わらぬ法則として映ずるのだ。そのわけは第一に外的条件が人間の夢と背馳するからであり、次にたとえ状況の恩恵を受けたところで、魂は自分の幻想を心ゆくばかり堪能しようとして自らを食い潰すことは妨げられないからである。（ブルジェ『現代心理論集』前掲六一頁）

さらに重要なのが次の考察である。

フロールベルが彼の人物たちに関して作り上げた概念をさらに深く掘り下げてみると、彼らの苦しむ不均衡がいつも至る所において、彼らがやがて経験すべき感情について自らあらかじめある観念をつくりあげておいたことに由来して

いるのが認められる。環境によつてまず破綻させられるのはこの生活以前の觀念であり、次に彼ら自身である。この場合、腐蝕酸のような不吉な要素の役割をつとめ、人間を確実な不幸に陥れるものは、だから思想である。ただし經驗に服従する代わりに經驗に先立つ思想である。(プールジエ『現代心理論集』前掲六六頁)

プールジエは「人間の夢が外的条件と背馳すること」、「經驗以前の觀念をつくりあげてしまうこと」という思想の弊害を説き、「頭腦の濫用が近代の重大な病」となつているとする。さらに「思想をもう有益ではなくて有害なある力」と見なし、近代文明批判へと至るのである。

教育や科学の発達によつて、人々は「分析精神」を培つてい、あらゆる種類の思想を精神に注ぎ込むが、人はそれによつてどれほどこころの動揺をきたしたのかわからないという。『ポバリー夫人』や『感情教育』も文学中毒の例証であるとする。未先に終わった哲学的道化芝居『ブヴァールとベキウシエ』⁽²¹⁾ではあらゆる新思想がなんの準備もされていない二つの頭腦に恐ろしい注入をすると評されている。さらに思想は人間の意志や肉体にも影響をもたらずとした。

思想のあまりに熾烈な修練のためにほとんど必然的に生みだされる恐れのある生理的摩滅や感情と意志との摩滅が生じる。(プールジエ『現代心理論集』前掲六八頁)

パリの近代人には華奢になつた四肢、鋭い視線、貧血化や筋肉の力の減退、過度の神経衰弱が見られるという。そして分析に分析するということは感性を摩滅させ、意欲も意志の力もなくすことになる。近代人は「さながら子どもが毒薬を玩具にするように、思想と戯れる。」という。ただ考えに考え、満たされた思いを抱くことはなく、結局は無が生じ、「二ヒリズム (Zweifelspiel) ⁽²²⁾」に陥るとプールジエはフローベルを評する。

このようなことがKと「先生」の生き方に表現されているのではないか。

②Kの生き方

Kは真宗寺に生まれた男であつた。中学にいた頃から宗教とか哲学とかというむずかしい問題で「先生」を困らせるというようにKは思想的な環境で育ちまたそれに興味をもつて生きてきた。Kは聖書やコーランも勉強していた。さらに伊豆へ旅した時、日蓮に関心をよせ、シユエデンボルグ⁽²³⁾など外国の思想も興味をもち勉強していた。明治時代になり、日本古来のものだけでなく、様々な思想が入つてきていた。それらをKどのようにつけて止めただろうか。Kはどれといつて確定的な思想をもつていたとは表現されていず、様々な思想を受けとめようとしていた。それは思想の濫用ではなかつたか。

確かに明治時代、西欧の様々な思想が日本に入つてきており河内清によれば、まずは実証主義が入つてき、三〇年代の初め

には、ドイツ観念論哲学が、非常な勢いでさかんになり東洋的精神主義とともに、それによって特にゆがめられた神秘化されたドイツ観念論が、従来の実証主義にかわって、思想界を支配するようになり、思想の混乱というものが生じていたという。⁽²⁴⁾

Kは理想を持っていた。「道のためには凡てを犠牲にすべきものだ」。「精進」、「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」、「恋も道の妨げになる。」などである。日本古来の宗教者と重なるように思われもしようが、シユエデンボルグなどの名前もあげられているように、純粋に日本的ではない。

然し我々は真面目でした。われわれは実際偉くなる積であるのです。ことにKは強かつたのです。(夏目漱石「こころ」

前掲二〇一頁)

Kも「先生」も大学へいくことを望んだのである。明治時代、大学へいくことは立身出世することであり、それも首都の大学へ行くことは優秀だということだ。パスカル・ローは東京の学生と西欧の学生の状況はあまり違わないという。⁽²⁵⁾「先生」とKも野心をもった若者たちであった。しかも故郷との縁を振り切り、自活することになる。Kもやはり近代人である。

「自由と独立と己」の人生の始まりである。自分は自由だ。自分は一人でやっていける。そう思い、養家からも実家からも勘当され自活する。理想を持ちつつ、自由、独立で、自分の夢を追うことになる。

だが現実はその夢に反するものである。実家からも勘当され、自活しなければならず、それは簡単なことではなかった。「夢が外的条件と背馳する」。そしてそれは肉体的にも、精神的にも影響してくる。

過度の労力が次第に彼の健康と精神の上に影響して来たやうに見え出しました。(略) 彼は段々感傷的になつて来たのです。時によると、自分丈が世の中の不幸を一人で背負つて立つてゐるやうな事を云ひます。(略) 自分の未来に横たはる光明が、次第に彼の眼を遠退いて行くやうにも思つて、いらいらするのです。(略) 其上窮屈な境遇にゐる彼の意志は、ちつとも強くなつてゐないのです。彼は寧ろ神経衰弱に罹つてゐる位なのです。(夏目漱石「こころ」前掲二〇九〜二一〇頁)

Kは神経衰弱のようになり、「意志の力を養つて強い人なる」という気持ちとは逆に意志や意欲が減退してしまふ。

批評の仕事のしすぎは、それに没頭してきた者に意欲を失わせてしまうことがある。というのは行動させる唯一のものである幻想の魅力が去つてしまふからであり、それに努力の究極的な無益さが見えだして、諦められずに断念することの苦々しさを味わいながら伝道の書の言葉を心に繰り返す策然たる魂がもうどんな目的にも誘惑を感じなくなる

からである。(ブルジェ『現代心理論集』前掲六九頁)

夢を抱き、理想を追うが、「肉体的精気の枯渇」、「意志や意欲の低下」が訪れる。

理想を追うこと、それは彼らの最もよいものであるが、それらの夢は現実とぶつかり、実現の難しいものであり、敗れ去ることの多いものであった。だからブルジェがエンマについて言うように「彼らの最もよいものが破滅の原因」になる。Kは理想を追ったがため挫折感も大きかった。

またKは経験以前に「道のためにはすべてを犠牲にすべきものだ」という観念、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」という観念をつくりあげていた。これが人間を確実に不幸に陥れるとブルジェはいうのである。「先生」のことは信用していたKは私の部屋に移ってくる。そしてお嬢さんに出会う。お嬢さんへの恋はあきらめることの出来ないものであった。「平生の主張はどうするのか」と「先生」にいわれたKは我にかえる。経験以前に思想をつくりあげ、それに精進してきたKであった。そして、恋という経験をする。それは犠牲にしたり、道のためにやめたりすることのできないものであった。自分の理想をこわしたのは他ならぬ自分自身の恋という激しい感情であった。自分で自分を裏切ったのである。それを「先生」に指摘され、「己」が崩壊する。経験以前の観念がなかったら、「先生」に裏切られたことだけで自殺までしただろうか。

フロールベルが具現したのは「彼がひたすら苦しんだ悪、すな

わち現実以前に現実のイマージュを感覚と感情以前に感覚と感情のイマージュを知ってしまったという悪である」とブルジェはいう。

なぜ熱烈な魂はみな蜃気楼に騙されて、絶えざる恍惚感を満足させるものを自分は内心に持っているのだと思ひ込まれているのであろうか。(ブルジェ『現代心理論集』前掲六

四頁)

Kの魂は熱烈なものであり、常に精進して道の実現をできると思っていた。純粹であるからこそ純粹な夢をもった。しかし彼は夢を実現できなかった。

③「先生」の生き方

『「ころ」の「先生」は懐疑的な人間として描かれる。「先生」は父と母の死の場面から懐疑的である。熱の高い母は「この子をどうぞ何分」そして「東京へ」といった。これが本当に母の遺言であったかどうか。たしかに以前から東京へいくはずであり、おかしくはないが、母はすでにうわごとのようなときもあり、本当のところからでた言葉なのかと疑う。

たゞ欺ういふ風に物を解きほだいて見たり、又ぐるく廻して眺めたりする癖は、もう其時分から、私にはちやんと備はつてゐたのです。それは貴方にも始めから御断りして

置かなければならないと思ひますが、其実例としては当面の問題に大した関係のない斯んな記述が、却つて役にたちはないかと考へます。貴方の方でもまあその積で読んで下さい。此性が倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで、私は後来益他の徳義心を疑ふやうになつたのだらうと思ふのです。それが私の煩悶や苦悩に向かつて、積極的に大きな力を添えているのは慥ですから覚えてゐて下さい。

(夏目漱石「こころ」前掲一六〇頁)

「先生」の考え方、感じ方が『こころ』の事件の間接的原因として説明されている。さらに叔父に裏切られたということが分かつた後、その性格が強くなつていく。その懐疑的性格は多くの場面で出現している。

私の気分は国を立つ時に既に厭世的になつてゐました。他は頼りにならない物だといふ觀念が、其時骨の中迄染みこんでしまつたやうに思はれたのです。(略)鉛を呑んだやうに重苦しくなる事が時々ありました。それでゐて私の神経は、今云つた如くに鋭どく尖つて仕舞つたのです。(夏目漱石「こころ」前掲一八二頁)

「Keen analytic spirit」(鋭い分析精神)が出現する。私の心は過剰に人を疑うようになり極端な懷疑に陥つてしまふ。お嬢さんの家に移つてからも続く。

時々彼等に対して気の毒だと思ふ程、私は油断のない注意を彼らの上に注いでゐたのです。おれは物を偷まない巾着切見たやうなものだ、私は欺う考へて、自分が厭になる事さへあつたのです。(夏目漱石「こころ」前掲一八三頁)

茶の間か、さもなければ御嬢さんの室で、突然男の音が聞こえるのです。其声が又私の客と違つて、頗ぶる低いのです。だから何を話してゐるのか丸で分らないのです。(略)さうかと云つて、起つて行つて障子を開けて見る訳には猶行きません。私の神経は震へるといふよりも、大きな波動を打つて私を苦しめます。(夏目漱石「こころ」前掲一九三頁)

「先生」は觀察し、分析し、省察し、懷疑する。些細なことに神経をとがらす「先生」が描かれている。お嬢さんへの恋は確かなものに思われたが、奥さんがお嬢さんと自分を結びつけようとしてゐるのではないか、お嬢さんが策略家ではないかとまで觀察し、分析し、省察し、懷疑する。

しかし「先生」もまたKの説得ある説明によつてKと同じ道を進もうと思ふようになつていた。「先生」も思想をもち、理想を追つた。しかしKと異なるのは恋愛至上主義者であるということだった。「愛」という理想をもつていた。高尚な愛の理論家だった。これも経験以前の觀念である。しかし実際の結婚生活はうまくいかなかつた。「最も幸福な一対であるべき筈

です」と「先生」がいうように、どんなことが起ころうが幸福であるべきであったのにそうはならなかった。Kの自殺があるうが、愛は壊れるはずはなかったののである。

さらにまた「先生」は経験以前の観念を持っていた。叔父にどんなに騙されようと自分だけは、倫理的な人間だと言う観念を持っていた。

私は倫理的に生れた男です。又倫理的に育てられた男です。（夏目漱石「こころ」前掲一五七頁）

これは遺書の最初で語られる言葉であるが、「先生」にも経験以前の観念、叔父に裏切られたあとも、自分は倫理的であるという観念があつた。ところがKに対して自分がしたことは全く倫理的とは言えないことであつた。

自分もあの叔父と同じ人間だと意識したとき、私は急にふらふらとしました。他に愛想を尽かした私は自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。（夏目漱石「こころ」前掲二八九頁）

自分も間違いを犯す存在だと思つていたら、「先生」はそんなに苦しまなかつただろう。しかし自分は倫理的だと思つていた。自分で自分は間違いないと思つていたものを壊したのは自分である気がついたときの衝撃は激しかった。叔父にどんな

に裏切られようと自分だけは大丈夫だと思つていた。その自分を裏切つたのは自分であつた。それは動けなくなるほどの苦しみであつた。その後「先生」は、常にKへの罪悪感から逃れられなくなつてしまい、どうしてKが自殺してしまつたのか考えに考え、何をしてみてもそれは何の意味もなくなる。まるで「自分の幸福のことを考えすぎた医者（エンマ）の妻（エンマ）」引用者注、自分の情緒のことを考えすぎた市民階級の青年（フレデリック）引用者注、無数の学説のことをあまりに考えすぎた二人の事務員など（フヴァールとベキユシエ）引用者注」のように。フロアベルの人物たちはあまりに考えすぎ「いつも自分を見つめていることに倦み疲れ、自分の身に対する絶え間のない過度に鋭い意識に困憊して」⁽²⁷⁾ニヒリズムに陥る。

『こころ』にニヒリズムはあるだろうか。たしかに「先生」の考えに考える姿にはあるかもしれない。しかし「先生」はモラルについて悩み、それは自由意志があるからだとも言えよう。『九大日文』二五号掲載の拙稿を参照。さらに「先生」と「私」の結びつきの強さ、次世代への継承によつて、ニヒリズムに陥ることなく、希望をもたらずものとなつていく。漱石作品にはどこか必ず希望をもたらずものがある。

この打ちひしがれた者たちを、彼らが存在にたいする高邁な理想を抱くことから出発したがゆえに、彼は愛している。

このときの「彼」とはツルゲーネフだ。ツルゲーネフについての評論では、彼が創作した人間はみな失敗した人生を送るが、ツルゲーネフは登場人物を理想を抱いたがゆえに、愛していて、作品に強いペシミズムは生じないとブルジェはいう。しかしフローベルは違った。「フローベルは登場人物を憎んだ」⁽²⁸⁾という箇所 *Modern French Literature* の中で漱石の線引きがある。漱石はKや「先生」を愛したのだろうか。少なくとも日本人の読者は愛したのではなからうか。

四、「私」が受け取ったもの

「遺書」の最初で「先生」は「暗いものをじつと見つめて、その中からあなたの参考になるものを御掴みなさい」という。それは「不可知」で明らかにした人間のこころは観察からだけではわからないということだろうか。また人間には「モラル」があるということであろうか。そしてKと「先生」の生き方からは、近代文明を特徴づける「思想と理知の濫用」による思想の危険性などであろうか。またそれによる肉体的精気の枯渇であろうか。どんなにすばらしい理想を抱こうが「外的条件との背馳」が起り、実現できなかつたり、また思想は経験以前の観念を作らせ、人に幸福を想像させるが、現実の感情は違ったものとなるとそこには絶望が生じるということだろうか。たしかに近代には多くの思想が作られてきた。人は純粹であればあるほど、その思想に人生のすべてをかけてしまう。しかしその

「イズム」はあるときに有益でもあるが、信じ込みすぎると危険なものとなってしまうものもある。

一八世紀、一九世紀、多くの思想が作られたが、ロマン主義の理想が敗れつつあった時代、フローベルには「人間の営為は結局は失敗に終わるといふのは、彼の眼には永劫に変わらぬ法則として映じた」とブルジェはいう。

日本でも、明治という近代化が始まり、外国からたくさん思想が流入してきた。パスカル・ローが「近代化のもたらした問題が日本でも起こった」という通りである。特に日本の場合、西欧では順次提出された思想が一気に流入し、混乱が激しかったということである。前述の河内清によれば、マルクス主義の雑誌にニーチェやショーペンハウエルが掲載されるなどである。唯物論を主張する雑誌に観念論者が紹介される。

そのような時代、漱石もフローベルのように、人間の営為は失敗に終わるといふことを『こころ』で言いたかつたのだろうか。そうではないだろう。確かに失敗をしたが（実際に失敗した人生もあったらる）その教訓を若者たちに「心理的遺産」として残し、よりよい人生を築いて欲しいという作家としての願いがあつたらう。その証拠に『こころ』には漱石の隠されたメッセージがある。それは「中」の「私」の兄の姿である。

イゴイストは不可いね。何もしないで生きてゐやうというのは横着な了簡だからね。人は自分の有つてゐる才能を出る丈働かせなくつちや嘘だ。（夏目漱石「こころ」前掲一四三

兄はこれから世の中で仕事をしようという気が満ち満ちている人物であると表現されている。自分の才能を生かし、それがまた世の中で役に立っている。このような人物を配したのはやはり隠された肯定的提言があるからではないだろうか。思想のみに捕らわれず自分の才能を生かせる、社会と矛盾しない生き方である。それが自己本位ではなかるうか。ただ思想を掲げるのは他者本位である。思想は借り物の場合が多い。

漱石は英国留学時、たくさんの文学や科学や思想を学んだ。二年程の間に一八、一九世紀に出された主要なものをほとんど読んでいる。漱石旧蔵書がそれを証明している。あまりの多様さ、勉強しすぎに神経衰弱になるほどであった。たしかに思想や科学は意味のあるものでもあり、社会の発展に貢献するものでもあった。しかし様々な思想に惑わされず、本当に自分に合ったものを探し当てた。それが自己本位であった。

『こころ』発表後、学習院の生徒たちに向かつて行った『私の個人主義』のなかで自己本位ではあるが、社会と矛盾しない在り方が提言された。

比喩で申すと、私は多年の間懊悩した結果ようやく自分の鶴嘴をがちりと鉋脈に掘り当てたような気がしたのです。

なお繰り返していうと、今まで霧の中に閉じ込まれたものが、ある角度の方向で、明らかに自分の進んで行くべき道

を教えられた事になるのです。(夏目漱石「私の個人主義」『漱石全集』第一巻、岩波書店、一九六一年一〇月 四四五頁)

ただの思想ではなく、他者の思想をかりて物を言う他者本位ではなく、自分の才能にあつた生き方、それがまた社会(誤った方向へいく社会ではない)と矛盾することなく、他人も尊重するものを探しあてたのである。それが出来たとき、人間の一生は充実したものとなる。そうしないと「人は一生まごまごとした人生を送らなければならない」と漱石はいう。

このことは『こころ』で「私」に語った内容とともに、大正の時代だけではなく、現代の若者たちにも充分生きた教訓となっている漱石の「心理的遺産」ではないだろうか。

※追記 本稿の元になっているパスカル・ローの「フランス人が『こころ』を読んだ時」(Lorsqu'un Français lit "Kokoro")という論文は、谷川徹三の論文「小説家夏目漱石の意図」(A propos du *Romaner Soseki Natsume*)は仏訳『こころ』le pauvre cœur des hommesの緒言として書かれ、また一九三四年三月 *France-Japon* 三九号に掲載された)に対する反論である。別稿にて二人の論争点を明らかにして、日仏の『こころ』の読みの違いを考察し、今後も『こころ』の読みの深化に努めたい。

*旧字は新字に改め、ルビは適宜省略した。

【注記】

- 1 Paul Bourget (1889), *Le Disciple*. Lemerre. (ポール・ブルジェ『弟子』上・下巻) 内藤濯訳、岩波書店、一九四一年七月)
- 2 Paul Bourget (1883), *Essais de psychologie contemporaine*. Lemerre. Paul Bourget (1885), *Nouveaux Essais de psychologie contemporaine*. Lemerre. 復刻版 (1899), *Essais de psychologie contemporaine*. Plon. (ポール・ブルジェ『現代心理論集』平岡昇・伊藤なお訳、法政大学出版、一九八九年一月)
- 3 Pascal Laut [Lorsqu'un Français lit "Kokoro"]. *France-Japon* 47, 1940, *France-Japon* 一九三四年一月月初版発行、一九四〇年四月終刊。全四九巻、日仏同士会。復刻版全七巻がゆまに書房から二〇一一年一〇月に刊行。
- 4 *la Nouvelle Revue* (新評論) のコラムに一評論が掲載されたが、五人分までまとめて一八八三年の *Essais de psychologie contemporaine* になった。そのとき序文が付けられた。その後一八八五年残りの五人がまとまり *Nouveaux Essais de psychologie contemporaine* となり同じく序文が付けられた。一八八九年の復刻版にも序文がある。
- 5 「彼は好きな作者の文句の中に身を投ずる。彼はその作者と、互いに胸襟をひらき、人間同士として語り合う。彼は作者が、恋愛を楽しんだり遊蕩したり、幸福を探したり不幸を堪え忍んだり、死や墓の彼方の暗黒と直面したりする方法について啓示となる言葉を吐くのを開く。そうした言葉は、それまで彼がほとんど気づかなかった感情の一字宙の中に彼を導き入れる。ところがこの最初の啓示からそういう感情の模倣までの距離はわずかであって、青年は間もなくその距離を乗り越えてしまう。」(ブルジェ『現代心理論集』前掲五頁)
- 6 Victor Giraud(1868-1955) philologue, journaliste.
- 7 ブールジェ『現代心理論集』前掲一九五頁
- 8 漱石旧蔵書の *Modern French Literature* には「The Evolution of Naturalism」(自然主義の興隆) にジュールジュ・サンドやアンリ・ベルなども入れられている。広い意味とはリアリズムと同様である。狭い意味のナチュリズムはゾラをさしている。ブルジェはナチュリズムという言葉を使わず「観察をもとにする」と表現している。
- 9 想像力には外界の想像力と内界の想像力があり、フロアベルには両方あったが、ゾラを主とするグループは内界の想像力をなくし現実的ではあるが、いびつな人間性が出現したとしている。(『現代心理論集』前掲七頁)
- 10 Paul Bourget (1885), *Cruelle Enigme*. Paris: Lemerre. (ポール・ブルジェ『傷ましい謎』田辺禎之助訳、春陽堂、一九三六年一月)
- 11 Paul Bourget (1887), *Mensonges*. Paris: Lemerre. (ポール・ブルジェ『嘘』内藤濯訳、岩波書店、一九五一年九月)。漱石旧蔵書の *French Novelists of To-Day* に詳しい説明がある。政治家の娘モレーン夫人が夫や愛人がいながら若い青年と恋する。自由意志の強い夫人に青年は翻弄される。その作品に対して、オクターブ・ミルボー (Octave Mirbeau) の「女性の部屋 (Femme de Chambre)」には、女性が自由意志を持つには金持ちでなければならぬかという批判の意見が掲載された。それに対してアナトール・フランスは「that the labyrinth of the human soul may for him best be studied in the rich and leisured classes」p150 (人間の魂の迷路は金持ちや暇のあるクラスにおいて最もよく学ばれる) とブルジェが考えているのなら、ブルジェは書く権利を持つと反論した。そこに漱石の線引き

- もある。
- 12 田中琢三『ブルジェ』弟子』と一九世紀末「問題小説」における師弟関係』『お茶の水女子大学人文科学研究』第九巻 二〇一三年 四〇〜四六頁。科学と宗教の対立、共和主義と反共和主義の対立が反映されている。
- 13 Maurice Barrès (1897), *Les Déracinés*. Paris: Fasquelle. (モリス・バレス『根こそぎされた人々』吉江喬松訳、新潮文庫、一九三九年五月)
- 14 Emile François Zola (1893), *Le Docteur Pascal*. Paris: Les Rougon-Macquart. (エミール・ゾラ『パスカル博士』小田光雄訳、論創社、二〇〇五年九月)
- 15 H.A.Taine. (発行年不明), *History of English literature*. New York: Lovell. 漱石旧蔵書(テータヌ『英国文学史』全三巻、平岡昇訳、創元社、一九四三年一月)
- 16 B.W.Wells (1910), *Modern French Literature*. London: Sir I.Pimms&Sons. 漱石旧蔵書
- 17 Gustave Flaubert (1862), *Salambo*. Paris: définitive. (フローベル「サランポー」『フローベル全集』、田辺貞之助訳、筑摩書房、一九六六年一月)
- 18 B.W.Wells. *Modern French Literature* p433 において次のように書かれてゐる。「Flaubert marks the transition from Romanticism to this phase of material realism」(フローベルはロマン主義から唯物論的リアリズムへの移行を示している)
- 19 Gustave Flaubert. (1857), *Madame Bovary*. Paris: suivie des actes du procès. (フローベル『ボヴァリー夫人』伊吹武彦訳、岩波文庫上下巻、一九四九年一月)
- 20 Gustave Flaubert (1869), *L'Éducation sentimentale*. 発行所不明(フローベル「感情教育」『フローベル全集』、生島遼一訳、筑摩書房、一九六六年二月)
- 21 Gustave Flaubert (1881), *Bouvard et Pecuchet*. Paris: inachevé. (フローベル「ブヴァールとペキュシェ」『フローベル全集』、新庄嘉章訳、筑摩書房、一九六六年八月) 事務員であった二人は遺産相続後、農業、化学、生理学、医学、天文学、地質学、考古学、史学、文学、美学、政治学、社会学、哲学、宗教学、教育学、倫理学に相次いで熱中することがよく失敗し、もとの事務員にもなる。未完であるが、構想が残されている。
- 22 「Nihilisme」の「nihil」は語源がラテン語で「nil」=「無」である。だからすべては「無」である。虚無主義。
- 23 Emanuel Swedenborg (1688-1772) スウェーデンの科学者・官吏・政治家・神学者・神秘主義者。
- 24 河内清『ソラと日本自然主義文学』梓出版社、一九九〇年九月 二二五頁
- 25 Pascal Laut 「Lorsqu'un Français lit "kokoro"」 p94
- 26 B.W.Wells. *Modern French Literature*. p435 「The union in him of a deep poetic feeling with the keen analytic spirit produced a bitter sense of disproportion between what might be and what is」(彼の中で深い詩的感情と鋭い分析精神の結合は、あるはずのこととあるはずの不均衡の苦しさをもたらす)
- 27 ブールジェ『現代心理論集』前掲七〇頁
- 28 B.W.Wells. *Modern French Literature* p437
- 29 河内清『ソラと日本自然主義文学』前掲18 二三五頁
(九州大学大学院地球社会統合学科学科博士後期課程一年)